

『山之辺の道三輪山の麓を歩く』 3丁目 井守徳弘

●予定コース

磯城嶋金刺宮—仏教伝来之地碑—海柘榴市観音堂—金屋の石仏—志貴御県坐神社・
磯城瑞籬宮—平等寺—大神神社(三輪明神)—大直禰子神社—久延彦神社—
狭井神社—月山記念館—玄賓庵—桧原神社—井寺池—茅原大墓古墳—茅原狐塚
古墳—JR巻向駅 (約8km・午後4時ごろ解散予定)

●磯城嶋金刺宮

第29代欽明天皇とは、第26代継体天皇の嫡子の皇子で6世紀代の大王とされる人物である。初瀬川と栗原(おおばら)川にはさまれた地域を、(シキ)または(磯城嶋)(式嶋)(敷島)(城島)などとよばれ、『日本書紀』では、この地を欽明天皇の宮とする、磯城嶋金刺宮がいとなまれたとある。「しきしま」の「しま」とは、宮廷領の一区域を指し示すことから、「しきしま」は日本国を指す言葉になった。

『万葉集』13-3254 柿本人麻呂(人麿)

「磯城島の 大和の国は 言霊(ことだま)の 幸(さき)はふ国ぞ ま幸(さ)くありこそ」
(訳)日本の国は言霊が幸いをもたらす国です。どうか私が言葉で「ご無事でいて下さい」と申し上げることによって、どうぞ無事でいて下さい。(海路の旅に上る人に餞した歌)

●仏教伝来之地碑

日本への仏教公伝については、有力な説として欽明天皇13年(552年)と宣化天皇3年(538年)の2説あることが知られており、一般的に宣化天皇3年(538年)が有力とされています。

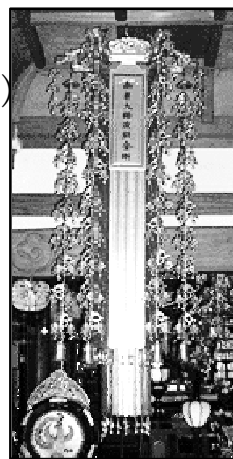
○欽明天皇13年(552年・壬申)説

『日本書紀』では、欽明天皇13年(552年、壬申)10月に百済の聖明王(しょうみょうおう)が使者を使わし、金銅製の釈迦仏一体や幡蓋(はたきぬがさ)の仏像や経典とともに仏教流通の功德を賞賛した上表文を献上したと記されている。この仏教伝来が蘇我稻目と物部尾輿による崇仏論争が発生しました。

天蓋



幢幡(どうばん)



○宣化天皇3年(538年・戊午)説

『上宮聖徳法王帝説』(8世紀ごろに成立した現存する聖徳太子伝記としては最古のものである)や『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』(わが国最古の寺社縁起。元興寺は法興寺とも呼ばれ、現在の飛鳥寺の前身である)においては、欽明天皇の「戊午年」に百済の聖明王から仏教が伝来したとある。しかし書紀での欽明天皇治世(540年～571年)には戊午の干支年が存在しないため、最も近い戊午年である538年(書紀によれば宣化天皇3年)が有力と考えられた。

なぜここが伝来地かという点、この初瀬川は大和川の上流にあたり、百済から贈られた仏さまは、難波の海から大和川を溯り、初瀬川のこの港に着き、ここは、欽明天皇の磯城島金刺宮のあった地で、初瀬川と栗原川に挟まれた地を磯城島と呼んでいた。

●海柘榴市(つばいち)観音堂

海柘榴(つば)とは椿のこと。

『日本書紀』に推古天皇15年(607)、聖徳太子は小野妹子を大使とする遣隋使節団を派遣した。一行は、海柘榴市の港から川船で大和川を下り、難波津で大型の外洋船に乗り換えて旅立っていった。翌年、小野妹子と隋の使節の裴世清らは筑紫に着き、新しく造った難波の高麗館(大阪中之島)にに入り、飾り馬75匹を遣わして、海柘榴市に迎えている。

古代の市場である海柘榴市は三輪・石上を経て奈良への山之辺の道、初瀬への初瀬街道、飛鳥への磐余の道、大阪河内和泉から竹之内街道などの道がここに集まり、また大阪難波からの舟の便もあり、大いににぎわいました。

また、春や秋のころには若い男女が集まって互いに歌を詠み交わし遊んだ歌垣は有名です。後には伊勢・長谷詣が盛んになるにつれて宿場町として栄えました。(案内板)

『万葉集』12-3101

「紫は 灰さす物そ 海柘榴市の 八十の衢(ちまた)に 逢える児やたれ」

(訳)紫の染料は(椿の)灰汁をさして美しさが出る。女も男に愛されて美しくなるものだよ
海柘榴市の 八十の街で出会ったあなたは誰なの。

市で出会った男女の相聞歌です。男性がナンパしたのですね。「名前は？」と声を掛けたのでしょ。

平安時代には、長谷詣での宿泊地として栄え、清少納言は『枕草子』で「市は たつの市 さとの市 つば市。大和にはあまたある中に、長谷に詣づる人のかならずそこにとまるは、観音の縁のあるにや、と心ことなり」海柘榴市を紹介している。

海柘榴市観音堂には観音石仏二体を本尊として安置している。右の一体は十一面観音像で戦国時代末期の元亀2年(1571年)8月吉日の銘があり、左のもう一体は聖観音立像で、戦国時代の文亀2年(1502年)4月18日の銘がある。
長谷寺式の錫杖を持っている。

●金屋の石仏

弥勒



釈迦

収蔵庫の中に納められた二体の石仏は右が釈迦、左が弥勒と推定されています。高さ2.2m、幅約80cmの二枚の粘板岩に浮彫されたこの仏像は、平安時代初期の貞観時代(859～877)、新しくも鎌倉時代のもものとされ、重要文化財の指定を受けています。右側の赤茶色の石は、石棺の蓋であろうと思われます。(案内板)
元は、少し北にある平等寺にあったものを、明治維新の頃に廃仏毀釈のため村人が現在の場所に移した有ったそうです。床下にも石棺が在ります。
金屋の石仏は耳の悪い人に靈験があるとのこと。

●志貴御県坐神社・磯城瑞籬宮(しきのみずかきのみや) 式内社

祭神は磯城県主の祖である天津神饒速日命(あまつにぎはやひのみこと)。
『古事記』や『日本書紀』によれば、神武東征の際に一行が熊野山中で難渋していたとき、京都の賀茂御祖神社(京都市左京区にある下鴨神社)の祭神とされている賀茂建角身命(かもたけつののみこと)が、八咫鳥(やたがらす)に化して一行を宇陀まで先導した。そのころ磯城の地を支配していたのは、兄磯城(えしき)と弟磯城(おとしき)という兄弟だった。彼らを帰順させなければ、一行は大和に入れない。そこで、八咫鳥は天皇の使者として磯城に赴き、二人に降伏を勧めた。兄磯城は勧告に応じず結局戦闘で殺されてしまう。

しかし、帰順した弟磯城は磯城県主に任命されこの地域を支配したという。新撰姓氏録によれば、磯城県主は天津饒速日命(あまつにぎはやひのみこと)の末裔となっており、その一族が祖神をこの神社に祀っていることになる。ちなみに、御県とは天皇家直属の皇室領のこと。大和国には6カ所(高市・葛木・十市・志貴・山辺・曾布)に御県がありました。

拝殿の前の庭の西側に、ここが第10代崇神天皇の磯城瑞籬宮の跡地であることを示す石標が建っている。実際の宮跡はこの神社の境内ではなく、境内の西側にある天理教会の建物とその北隣の三輪小学校のあたりにあったと推定されている。

先年導水路工事中、この辺りから縄文式土器、弥生式土器、須恵器など多数出土した。それ以来、考古学上も古代祭祀遺跡地として注目されるようになった。

第10代崇神天皇は、崇神天皇7年(紀元前91年)三輪氏の祖である大田田根子を祭祀主として大物主神を祀らたり、天照大神と倭大国玉神の二柱を宮中から他へ遷したりして、祭祀を充実させた。

さらに、北陸・東海・西海・丹波に四道将軍を派遣したり、国内の統治基盤を整えたりして、『古事記』での「初国知らしし天皇」(初めて国を領有統治された天皇)といわれた人である。

●平等寺

平等寺は、禅宗の曹洞宗寺院。三輪別所ともいう。本尊は十一面観音及び三輪不動尊である。かつては三輪明神(現・大神神社)の神宮寺であった。(大三輪町史)

伝承によれば、聖徳太子の開基、鎌倉時代初期の僧である慶円の中興とされている。明治時代の神仏分離令により、明治3年(1870年)廃寺となったが、明治11年(1878年)に平等寺の跡に、住吉の万平寺にあった「翠松寺庵」を移転、十一面観音を本尊として再建された。

昭和52年(1977年)には、元の「平等寺」という名前に戻り曹洞宗のお寺として「三輪山平等寺」は再興された。

昭和62年(1987年)に鐘楼、本堂を再建。平成16年(2004年)二重塔(釈迦堂)を建立。

●大神神社(三輪明神) 式内社(名神大社) 大和国一宮

祭神は大物主大神を主神とし、大己貴神(おおなむちのかみ)と少彦名神(すくなひこなのかみ)を祀っています。

大物主は蛇神であり水神または雷神としての性格を持ち、稲作豊穰、疫病除け、酒造り(醸造)などの神ですが、崇りなす強力な神ともされている。

『古事記』によれば、大国主神とともに国造りを行っていた少彦名神が常世の国へ去り、大国主神がこれからどうやってこの国を造って行けば良いのかと思い悩んでいた時に、海の向こうから光輝いてやってくる神様が表れ、大和国の三輪山に自分を祭るよう希望した。大国主神が「どなたですか？」と聞くと「我は汝の幸魂(さきみたま) 奇魂(くしみたま)なり」と答えたという。

「日本最古の神社」と呼ばれる歴史ある神社です。

神社の中で最も重要な「本殿」を持たず、背後の三輪山そのものを御神体とする、日本古来の神道の形式を残しており、拝殿奥にある3つの鳥居を組み合わせたような「三ツ鳥居(重文)」という特異な形式の鳥居も有名です。しかし三輪山山中の禁足地にあり、見えません。

三ツ鳥居は室町時代の古図に描かれていることからそれ以前からあった事は確かです。午後から行く大神神社の摂社である桧原神社(ひばらじんじゃ)に同じ形のものが存在します。こちらは昭和40年(1965年)に復元されたものです。

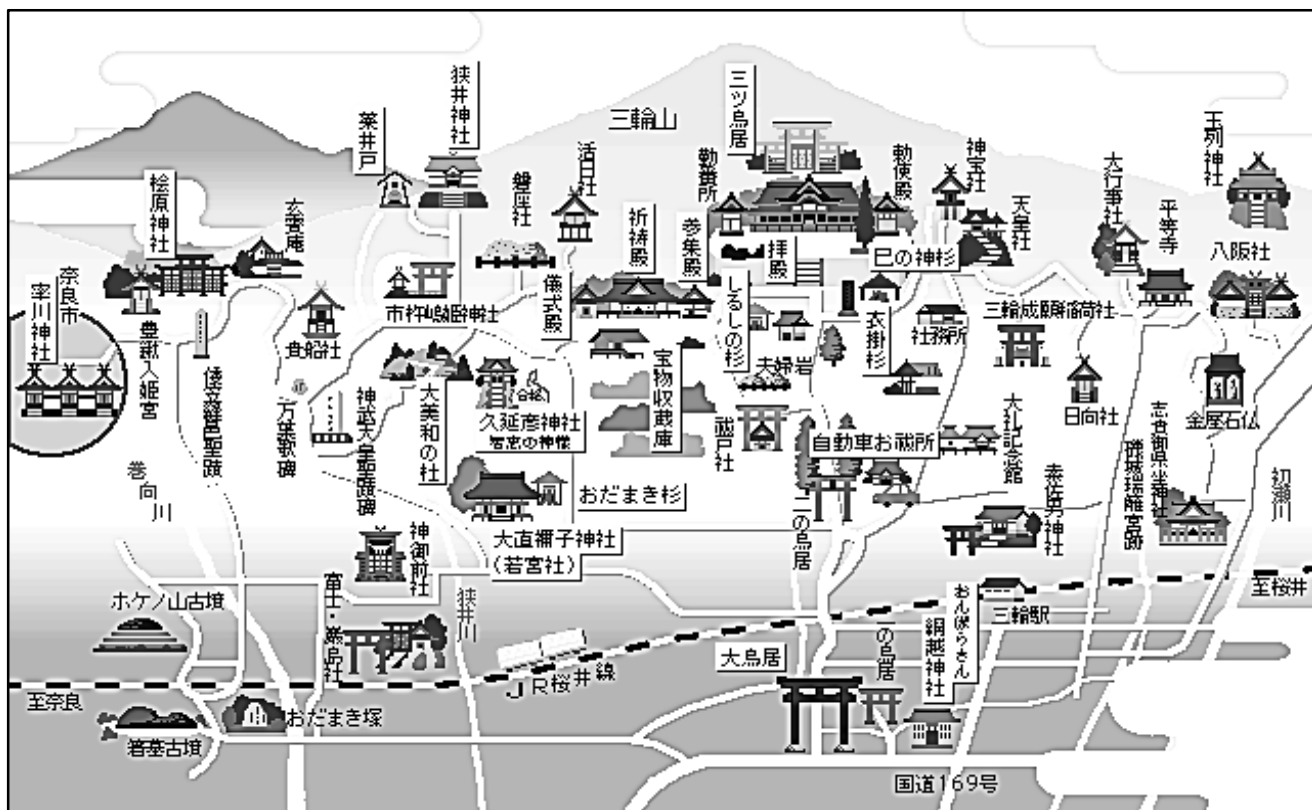
三ツ鳥居が何を意味しているのか不明です。

神宮寺であり中世以降三輪神道を発達させた大御輪寺(だいごりんじ)と平等寺は、明治初年に廃され、大御輪寺の本堂は摂社大直禰子(おおたたねこ)神社(本社境内)の本殿(重要文化財)に転用、その本尊十一面観音立像は聖林寺(桜井市下(しも))に移された。

○巳の神杉(みのかみすぎ)

江戸時代には、「雨降杉」と呼ばれていて、雨乞いの時に里の人々が集まり、この杉にお詣りをしていたらしいが、いつの時代からか、杉の根本に、巳(み)さん(=蛇)が棲んでいて、「巳の神杉」とよばれるようになり、根元の洞には今も白蛇が棲むと信じられ、巳の好物とされる卵が、酒とともにお供えされています。

○大神神社境内



○拝殿

現在の拝殿は、寛文4年(1664年)徳川4代将軍家綱の造営になり、西向きに建ちます。桁行9間(21m)、梁間4間(8m)、正面は三間一面の大向拝がつき、江戸時代を代表する堂々とした建物で、大正10年(1921年)に国の重要文化財に指定されました。拝殿の左右には、2つの建物が付属し、向かって右に勅使殿、左に勤番所があります。(どちらも県指定文化財)

○祈祷殿・儀式殿・参集殿

国の重要文化財となっています。拝殿・三ツ鳥居の老朽化に伴う保存修理にあわせて、「平成の大造営」事業で、平成9年5月8日に竣工しました。正面に祈祷殿、左に儀式殿、右に参集殿と3つの建物が、三輪山を背に西向きに建ちます。使用されている木材は、大部分が台湾檜で、一番太いものは樹齢1500年の原木から用いられています。

○衣掛杉(ころもがけのすぎ)

謡曲「三輪」にでてくる玄賓僧都(げんぴんそうず)が女人に与えた衣が、掛かっていた杉と伝えられています。女人とは三輪大神であり、このことに関して、『古今和歌集』には、「我庵(わがいは)は 三輪の山本 恋しくば とぶらいきませ 杉立てる門」という歌があり、三輪明神の神詠とされています。現在、覆屋が作られて、周囲10mにおよぶ巨大な古株が残されています。

●大直禰子神社(若宮社) 大御輪寺跡

祭神は大直禰子命(太田田根子命・大物主神の子孫)第十代崇神天皇の御代に神託によって茅渟県陶邑(塚)より大神神社の初代神主として召されました。大神氏の始祖となります。

配祀は少彦名命と活玉(いくたま)依姫命です。

この神社は、奈良時代には大神寺、鎌倉時代には大御輪寺として、本地仏十一面観音(現在国宝・聖林寺安置)と併祀されていましたが、明治の神仏分離以後は大直禰子神社として祀られており、社殿は国の重要文化財に指定されています。

昭和61年(1986年)より3ヵ年に亘り、調査・解体修理が行われましたが、用材の中には創建当初奈良時代後半のものが使用されていることがわかりました。(案内板)

『日本書紀』崇神天皇7~8年に太田田根子が大物主神を祀らせたことを記述している。

『古事記』には意富多々泥古(おほたたねこ)として登場している。

『日本書紀』では茅渟県(ちぬのあがた)の陶邑(すえむら)、『古事記』では河内の美努村で見つかり祭主としたとあります。

●久延彦(くえひこ)神社

祭神は久延毘古命。知恵の神。知識の神。久延毘古の「くえ」は、「崩え」(くえ)で動詞の「崩ゆ」(くゆ)の連用形。身体の崩れた男を指すと思われ、一本足の案山子(かかし)のことである。

『古事記』の神話の中で、大国主神が出雲の御大(みほ)(美保)の岬にいたとき、海上から羅摩(かがみ)の船(ガガイモの船)に乗り、鵝(ひむし)の皮(蛾の皮)の衣服を着た神が近づいた。だれもその神の名を知らなかったが、谷ぐく(ヒキガエル)は「クエビコなら知っていよう」と答えた。クエビコに尋ねてみると「これは神産巢日(かむむすび)神の御子、少名毘古那(すくなびこな)神(少彦名命)です」といった、とあります。

誰も知らなかった少名毘古那神の名を知っていた神であり、知識の神として崇敬されて、知恵の神とされたわけです。

●狭井神社 式内社

祭神は大神荒魂神で、病気を鎮める神として信仰を集めてきました。

御神体の三輪山への登拝口や、ご神水が湧き出る「薬井戸」などがあります。この霊泉は万病に効くと古くから伝えられており、遠近よりたくさんの方が受けに来られます。

祭神の大神荒魂神の「荒魂」は神の荒々しい側面、荒ぶる魂である。天変地異を引き起こし、病を流行らせ、人の心を荒廃させて争いへ駆り立てる神の働きである。

神の祟りは荒魂の表れである。

荒魂に対し、「和魂」(にぎたま)は雨や日光の恵みなど、神の優しく平和的な側面である。神の加護は和魂の表れであるといわれています。

祭祀を受けることによって和魂の性質に変わるのだそうです。

●月山記念館

月山記念館には日本刀の鍛錬場もあり月山一門の刀剣が展示されている。人間国宝・故月山貞一氏から三男の日本刀制作部門で無形文化財の指定を受けた月山貞利氏までの作品を展示している。

月山は日本刀の刀工の一派。鎌倉期から室町にかけて活躍した刀工とその一派。出羽国月山を拠点とした。その中で幕末に大坂に移住した系統が、現代まで残っておりここ奈良県桜井市を拠点として活動している。

●玄賓庵

玄賓僧都は、河内の弓削氏の出で道鏡(は叔父にあたる。京都山階寺(興福寺の前身)の僧である。桓武・嵯峨天皇に厚い信任を得ていたが、俗事を嫌った。桓武天皇の病氣平癒に功あり、律師に任じられたが、これを辞退して長岡京に遷都する2年前の延暦元年(782年)に三輪山の松原谷に庵を結んで隠棲した。勅使が追って来て、僧都宣命の詔を伝えたが、玄賓は次の歌を作って固辞したという。

三輪川の 清き流れに 洗ひてし 衣の袖は 更にけがさじ

(訳) 三輪山のあたりに隠棲して、俗世間や俗僧と交わることなく、三輪川の清き流れでせっかく綺麗に洗い清めた、僧侶としての本来の生き方を、いかに天皇の思(おぼ)し召しとはいえ、名利(名誉と利益)のためにけがすことはできませぬ。

玄賓僧都の草庵は山岳仏教の寺として栄えたが、その後荒廃し、寛文7年(1667年)に比久宴光が再興した。明治の神仏分離で現在地に移されたという歴史を持つ。草堂には、木造の玄賓僧都像や不動明王座像が安置してある。不動明王座像は重要文化財の指定を受けている。

世阿弥の作と伝えられる謡曲「三輪」は、玄賓僧都をモデルにしている。その筋書きでは、玄賓が三輪明神の化身である女性と知り合い、三輪の故事神徳を聞かされるというものである。

物語は三輪山の谷あい、世を捨てて庵を結び仏に仕えていた一人の僧都がいた。彼のもとに、美しい女性が仏に供える櫛(しきみ)と鬘(あか)水を持って通ってくるようになった。あるとき女人は秋も深まり夜寒になったので僧都の衣をいただきたいと、衣を所望した。僧都は乞われるままに衣を与えた。別れぎわに女人の住まいを聞くと、女人は三輪の里山すそ近くに住んでいると答えて立ち去った。不審に思った僧都があとを追って行くと、大木の枝に先ほど与えた衣がかけてあった。女人は三輪明神の化身だったのである。姿をあらわした三輪明神は、神も人も同じように迷いがある、僧都に接して仏道に縁を結ぶことができたと言ひ、その後三輪山の故事神徳を聞かせた。

僧都の衣が掛かっていたという杉が、大神神社の境内に現在残っている。「衣掛杉(ころもがけのすぎ)」と呼ばれる杉の古株で周囲が10mもあるものです。

また『方丈記』の著者として有名な鴨長明の著作に、『発心集(ほっしんしゅう)』なる書がある。この書は、長明が自らの反省と修養のために、日本の国内の出来事で「発心」に関して自分が見聞したことをまとめたものである。彼は、その「序」において、「生死を離れて早く浄土に生まれん」ことを目標として、「わが発心の一念を楽しむばかり」と著述の意図を述べている。そして、この書の冒頭に載せられているのが、外ならぬ玄賓僧都なのです。

● 檜原神社

祭神は天照大神、伊弉諾尊、伊弉冊尊です。

檜原台地に建つ檜原神社は、大神神社付近の摂社群の中では、最も北に位置している上に社格も最も高く創建も古い。天照大神が伊勢神宮に鎮座する前に、宮中からこの地に遷され、この地で祭祀されていた時代がある。第11代垂仁天皇の時に伊勢神宮へ遷されると、その神蹟を尊崇して、檜原神社として引き続き天照大神を祀ってきた。そのため、この神社は広く「元伊勢」の名で親しまれている。

寛政年間(1789年～1801)の台風によって、檜原神社は大きな被害をこうむり廃墟と化してしまった。だが廃墟のまま祭礼は行われてきた。戦後になって、現在のように整備された。三輪山の中にある磐座をご神体に行っているため、檜原神社には本殿はなく、拝殿もない。だが、大神神社では見えなかった三輪特有の「三輪鳥居」とその奥にある神籬(ひもろぎ。神霊が降臨する時の臨時の宿り場所。小さめの樹木や岩石が選ばれる)などが再建されました。

元伊勢は、三重県伊勢市に鎮座する伊勢神宮内外両宮(皇大神宮(内宮)と豊受大神宮(外宮))が、現在地へ遷る以前に一時的にせよ祀られたという伝承を持つ神社・場所をいいます。

元伊勢は大和国笠縫邑(檜原神社・卷向坐若御魂神社など(7社)、大和(6社)、丹波国(4社)、紀伊国(1社)、吉備国(8社)、伊賀国(10社)、近江国(14社)、美濃国(3社)、尾張国(5社)、伊勢国(22社)の合計80社もあります。

● 井寺池

池の周りに5基の歌碑が建ちます。

大和は国のまほろば たたなづく青垣 山こもれる 大和し美し 倭建命 古事記
(訳)大和の国は国々の中で最も優れた国だ。重なって青々とした垣のように国を囲む山々。大和は美しい。 川端康成の揮毫

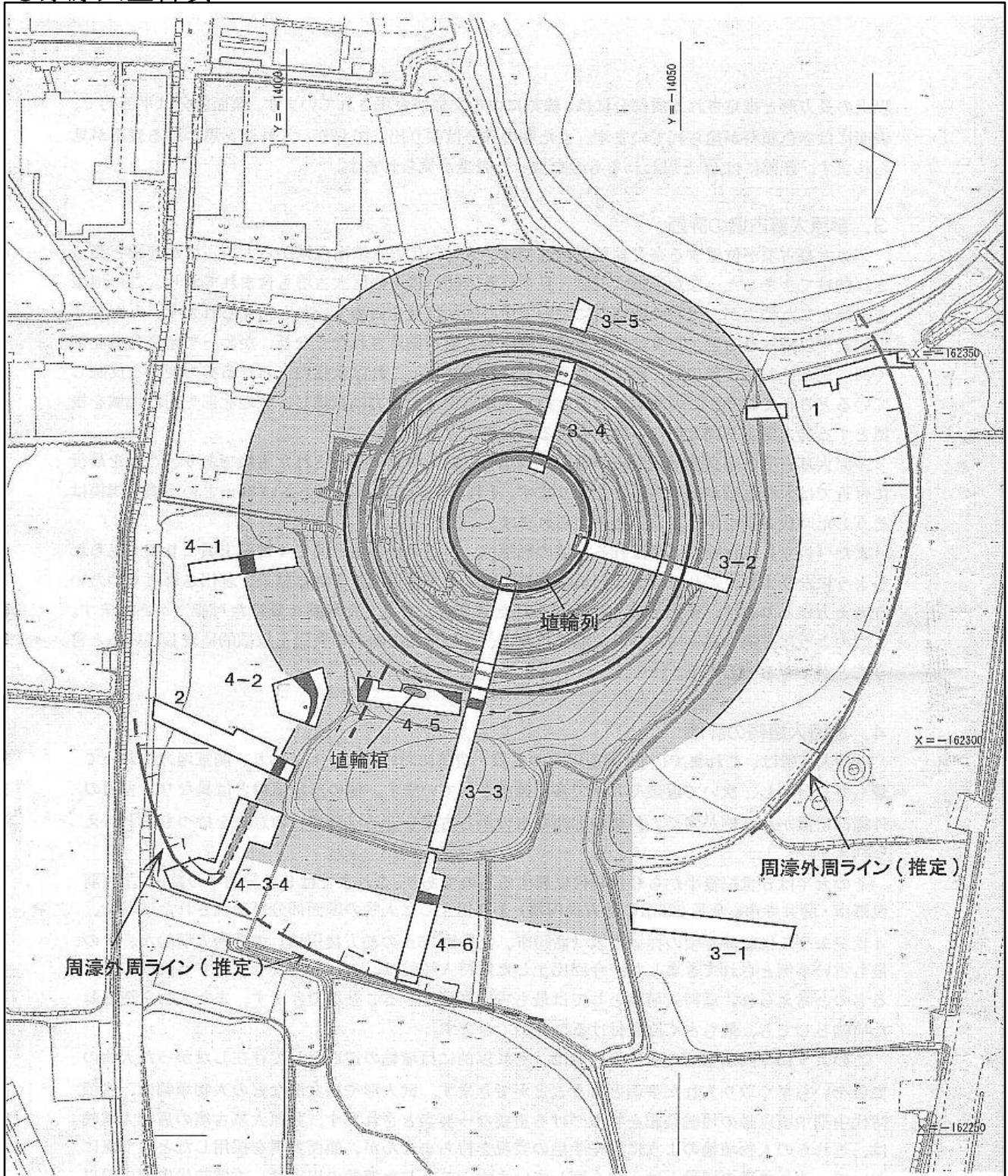
香具山は 畝傍を愛しと 耳成と 相争ひき 神代より かくにあるらし いにしへも
しかにあれこそ うつせみも 妻を争ふらしき 天智天皇 卷1-13
(訳)香具山は畝傍山を愛しいと思ひ耳成山と争った。神代からそうだったらしい。昔もそうだからこそ、今も愛する人を争うのだ。 日本画家・東山魁夷氏の揮毫

三諸(みもろ)は 人の守る山 本辺(もとべ)は 馬酔木(あしび)花咲き
末辺(うらべ)は 椿花咲く うらぐはし山ぞ 泣く子守る山 卷13-3222
(訳)三諸山は人が大切に守る山。ふもとには馬酔木が咲き、頂上には椿咲く美しい山。泣く子どもをあやすように大切に守る山。 国文学者・久松潜一氏の揮毫

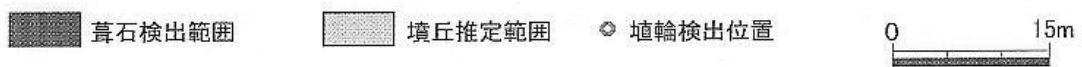
鳴る神の 音のみ聞きし 卷向の 檜原の山を 今日見つるかも
柿本人麻呂 卷7-1092
(訳)噂に聞くばかりだった卷向の檜原の山を、今日見ることができた。
茶道裏千家家元・千宗室の揮毫

いにしへに ありけむ人も 我がごとか 三輪の檜原に かざし折りけむ
柿本人麻呂 卷7-1118
(訳)昔の人も、私たちと同じように、三輪の檜原で、
小枝を折って髪に挿したのでしょうか。 病理学者・吉田富三氏の揮毫

●茅原大墓古墳



※図中の数字は、「4-6」は第4次調査第6トレンチ、「2」は第2次調査トレンチの意味で記しています。



茅原大墓古墳 墳丘推定復元図 (S=1/600)

茅原大墓古墳は平成8年(1996年)と平成20年(2008年)に発掘調査が実施された。埋葬施設は未調査だが、墳丘には葺石とともに円筒埴輪、朝顔形埴輪、家型埴輪などが樹立していたらしく、埴輪の破片が散乱していた。後円部の西側では、周濠の痕跡も確認された。

古墳は昭和57年(1982年)に国史跡に指定されたが、詳細な形態が不明なため、桜井市教委が08年から毎年、発掘調査してきた。その結果、全長は86m、後円部が直径72mの3段築成、前方部が長さ20mの2段築成と判明した。

前方部が極端に短く、形がホタテ貝に似ており、「帆立貝式前方後円墳」に分類された。

盾持人埴輪は、墳丘東側のくびれ部付近に流れ落ちた状況で出土しており、頭部から盾面の上半分にかけて、高さ約67cm分が残存していた。幅約50cm・高さ47cmの長方形の盾部分には、線刻による文様が表現されている。

古墳を守る兵士の役割を与えられたのではと考えられる。4世紀末ごろに制作されたとされています。人物埴輪の大半は5世紀後半から6世紀代に属するものであり、4世紀末の古墳なら、日本一古い人物埴輪ということになります。

○第2トレンチ出土 盾持人埴輪



顎の部分は張り出しており、入れ墨と思われる表現が見られる。頭部には三角形をした冑と思われるものを被っている。顔面部分は平面的、表面には赤色顔料が塗られている。

○埴輪棺



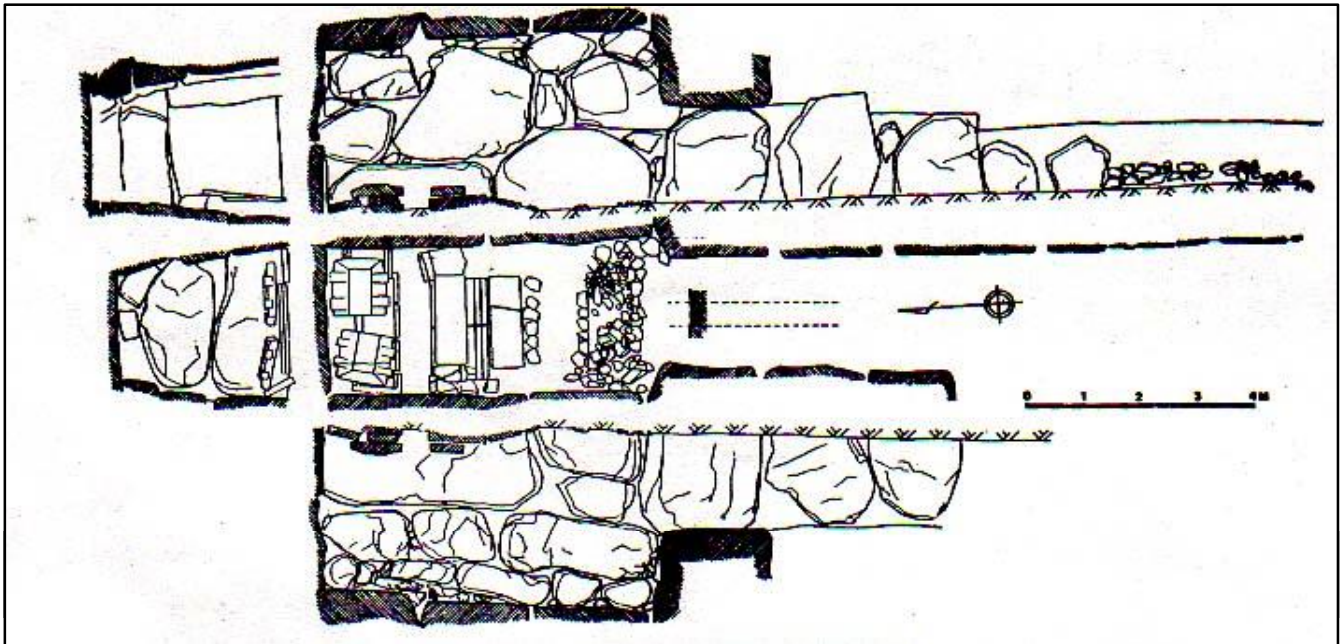
発掘調査では壺形埴輪のほか、形象埴輪として盾持人埴輪・鶏形或いは水鳥形埴輪などの存在が明らかになった。合わせてくびれ部の上にあたる前方部で埴輪棺が出土しています。

●茅原狐塚古墳

墳丘の正確な形は不明であるが、一辺が40mの方墳と推定されている。封土が失われて石室がむき出しになっている。この石室は南に開口した両袖式の横穴式石室で、奈良県でも屈指の大きさを誇る石室だ。

規模は、全長が約17.3mで、玄室の大きさは、長さ約6m、幅約2.6m、高さ3.2m、羨道は長さ約11.2m、幅約2mとのこと。石材は、三輪山の東に位置する纏向山のものとされている。

昭和31年(1956年)に発掘調査が行われ、その結果、玄室の奥壁に並行して凝灰岩の組合せ式石棺が1基、中央と入り口に2基分の破片が見つかった。さらに、羨道部からも25cmほどの鉄釘が6本出土したので、木棺が置かれていたと考えられている。



茅原狐塚古墳 実測図

4基も埋葬されていたのは珍しい。盗掘の被害を受けており、副葬品として残っていたのは須恵器と鉄刀だけだった。

築造時期は古墳時代末期の7世紀の前葉で、この時期の古墳としては、周辺では最大規模で、三輪氏の首長墓ではなかったかと推測されている。